

139 TIA患者における脳ポジトロンCT

桑原康雄，一矢有一，和田 誠，綾部善治，
三宅義徳，松浦啓一（九大 放）
松島俊夫（同 脳外），佐渡島省三（同 二内）

臨床的にTIAが疑われた7例に対して，脳ポジトロンCT検査を行った．脳局所血流量測定はO-15，CO₂の持続吸入またはO-15，H₂Oの持続静注により行い，酸素摂取率はO-15，O₂の持続吸入，血液量はC-11，COまたはO-15，COの一回吸入で行った．同時期に行ったX線CT検査では，いずれも明らかな異常所見は認められなかったが，脳ポジトロンCT検査では7例中5例に，局所の血流低下と酸素摂取率の上昇が認められた．

140 SPECTを用いたI-123-I-MP (n-isopropyl-p-iodoamphetamine) による脳血流シンチグラフィの検討

河村正，村瀬研也，下野礼子，菅田成紀，中田茂，
渡部真二，石川元正，飯尾篤，浜本研（愛媛大 放）

I-123-n-isopropyl-p-iodoamphetamine (IMP) は初回循環で高率に脳組織に取り込まれ、しかも組織からのWash outが遅いためSPECTに適した新しい脳血流測定用剤として注目されている。今回、我々は本剤を用いて脳血流分布のSPECT像を作成し有用性を検討したので報告する。方法はI-123-I-MP 3 mCi 静注約30分後に中エネルギー用コリメーターを装着したガンマカメラ (Searl社 LF0V) を用いて360度36方向より1方向40～60秒間で投影データを収集した。各投影データを画質改善用フィルタ (Wiener filter etc) で画像処理した後、Cheslerのフィルタを用いたConvolution法により画像再構成した。各種脳障害を有する患者を対象に、従来の方法 (血管造影、X線CT等) と比較し、その結果を報告する。

141 脳SPECT (¹²³I-IMP)の脳血管障害診断に対する有用性

町田喜久雄，本田憲業（埼玉医大医セ放），百瀬敏光，小坂 昇，西川潤一，飯尾正宏（東大放），松本 徹，飯沼 武（放医研），小山田日吉丸（国立がんセ），村田 啓（虎ノ門核），川上憲治（慈大放），久保敦司，高木八重子（慶大放），日下部きよ子（東女医大放），宇野公一（千大放），油井信春，秋山芳久（千葉がんセ），中島哲夫（埼玉がんセ），内山 暁（山梨放）

脳SPECTをI-123-IMPを用いて施行し，その有用度について，日本アイソトープ協会エフィカシー委員会活動の一つとして，多施設の共同研究を行うので報告する。

対象は確定診断のついた脳血管障害症例，コントロール症例合計50例である。これを委員を中心とする医師15人で読影を行うために，確定診断，読影診断用のワークシートを作成した。これらの経験について報告をする。

142 小児期発生片麻痺発症後4年から23年経た患者におけるI-123IMP脳シンチグラフィ

前田尚利，*小西行郎，松下照雄，柴田登志也，
早川克巳，浜中大三郎，小鳥輝男，石井 靖
（福井医大，放 *同小児科）

急性小児片麻痺とは正常分娩正常出産の後に発熱とともに片麻痺痲痺病知能障害を生じにわたり残存させる一群の疾患でありけっしてまれなものではない。その病因として多くは脳動脈又は脳静脈の閉塞によるものと考えられている。診断法としてはアンギオグラフィ-DSA CTなどが考えられるが、乳幼児、小児の発熱と痙攣発作急性期に侵襲的な検査を行うことは安全上からも問題があると考えられる。本院にて急性小児片麻痺発症後4年から23年経た重症片麻痺6例と軽度の片麻痺対照例1例についてN-Isopropyl (I-123)

P-Iodoamphetamine (I-123 IMP) の脳シンチグラフィを行った例とその内のDSAを施行した例について所見を報告する。重症例では3例が大腦半球欠損を示し残る3例が中大脳動脈支配域の欠損となっており急性小児片麻痺の原因として腦の大血管の閉塞が強く示唆された。I-123 IMPによるこのような非侵襲的検査は幼児期発生の脳血管閉塞障害の早期診断に重要な手掛りを与えてくれるものと考えられる。